PROGRAM

バラード 第1番 ト短調 op. 23 …… ショパン
バラード 第4番 ヘ短調 op. 52 …… ショパン
組曲「イベリア」より第1集 …… 第1曲 エボカシオン …… アルベニス
第2曲 エル・プエルト
第3曲 セビリャの聖体祭
スペイン舞曲集より …… 第2番 オリエンタル …… グラナドス
第5番 アンダルーサ
演奏会用アレグロ …… グラナドス
組曲「恋は魔術師」…… ファリャ

インタビュアー 長野哲久

四季のコンサート 夏

1992年6月19日(金) 6:45PM
浜松市民会館ホール
主催：浜松音楽友の会

(撮影 三浦雅一)

小山実稚恵ピアノ・リサイタル

プロフィール　小山実稚恵（こやま みちえ）

6歳よりピアノをはじめ、東京芸術大学、同大学院修了。吉田見知子氏、田村宏氏に師事。
毎日新聞社・NHK主催日本音楽コンクールをはじめ数々のコンクールに入賞。1981年、安宅賞、海外派遣コンクール第4回両合賞受賞。
1982年第7回チャイコフスキー国際コンクールピアノ部門第3位。1985年第11回ショパン国際ピアノコンクールで第4位を獲得。日本人としてはじめて世界の二大コンクールに入賞を果たし、一躍脚光を浴びる。
1986年第12回ショパン協会賞受賞、チェコのシュバン・フェスティバルに招待される。
芸大在学中すでにワルシャワ・フィルハーモニー楽団管弦楽団、ウィーン室内アンサンブルと協演。
1990年チャイコフスキー・コンクール入賞者によるコールド・チャリティ・コンサートに出かけ、モスクワのコンセルバトワール大ホールでリサイタルを行う。
1991年4月、東京都交響楽団アメリカ・ツアーにソリストとして同行。
1961年6月、ロンドンのロイヤル・フェスティバルホールにて、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団と協演。
全国各地でリサイタルを開くほか、国内外のオーケストラと数多く協演している。

ショパン（1810～1849）

バラード第1番の作曲を始めた1831年は、21歳のショパンがパリに出て社交界の人気者となった頃であり、完成した1835年は、作曲家としてもピアニストとしてもショパンの名声が確立された頃であった。その後、彼は3曲のバラードを書くが、第4番が完成した1842年は、結核の病が原因で体調もかなり悪くなっていた時期である。そして7年後の1839年には39歳の若さでこの世を去ってしまうので、バラード第4番はショパンの晩年の円熟期の作品ということになる。

4曲のバラードは、いずれも3拍子系のリズムで書かれているが、形式的には4曲とも自由に作曲されている。バラードとは物語や詩の分野で使われだした言葉である。ショパンのバラードもピアノで何かを物語ろうとしているかの上うな音楽であるが、具体的な内容はまったくわからない。

「バラード　第1番」　ト短調　作品23

4曲中もっとも劇的な音楽で、特に曲尾の長いコーダの情熱的な盛り上がりは見事である。

「バラード　第4番」　ヘ短調　作品52

4曲中もっとも雄大で変化に富んだ作品であるが、中心になっているのは、哀愁をおびた悲しげな旋律である。

ファリャ（1876～1946）

スペインの作曲家ファリャは、1905年にマドリードで開かれた作曲コンクールで1位となったオペラ「はかなき人生」で有名になった。その後、1907年から1921年までパリに滞在し、ドビュッシー、ラヴェル、ディカス、アルベニスらと親しく交わり、彼らの作曲技法と自国スペインの民族音楽とを融合させて、数多くの傑作を生み出した。こうしてファリャは、アルベニス、グラナドスとともに近代スペインの民族主義音楽の代表者となった。南国的で情熱的なリズム感、新鮮なメロディー、民族的で華やかな音色が、彼の音楽の特徴である。

「恋は魔術師」は1915年に作曲され、マドリードで上演された舞踊音楽である。物語は、アンダルシア地方のジプシーの古い伝説にもとづいたもので、死んでからも焼き餅を焼いて邪魔をする彼の亡霊に、他の美しい女性を与えて、自分の恋を成就するジプシー娘の話である。従って、音楽的にもアンダルシア地方の踊りの音楽が多く引用されている。そのうちの13曲が抜粋されて演奏会用の舞踊組曲となった。第8曲「火祭りの踊り」は、ジプシー達が悪霊を払いのけるために火をたいて踊る場面の音楽で、神秘的な躍動感にあふれている。全曲中もっとも有名で、これだけが単独で演奏されることも多く、特にピアノ独奏曲に編曲されて広く知られている。

アルベニス（1860～1909）

スペインの作曲家アルベニスは、優れたピアニストでもあり、ピアノ作品に重要なものが多い。ファリャと同様、スペインの民族音楽とフランス印象主義の音楽とを融合させ、独自の雰囲気をもった詩的な音楽を書き、スペインのショパンといわれることもある。アルベニス最後の作品となった組曲「イベリア」は、1906年から1908年にかけて書かれた4つの曲集から成り、近代スペイン音楽の重要な作品である。各曲集とも3曲から成っている。本日演奏されるのは第1集である。なお、イベリアとはスペインの古い国名である。

「第1曲　エボカシオン」　変イ短調

エボカシオンとは、<思い出>とか<霊の呼び寄せ>といった意味である。アルベニスは愛する祖国スペインに捧げたこの組曲の第1曲で、スペイン魂を呼び寄せることにより、聴く者を一気にスペインの世界に引きずり込もうとしたように思われる。

「第2曲　エル・プエルト<港>」　変ニ長調

白壁の建物、青い海、さわやかな薫風、といった南スペインの港町の、粋で活気にあふれた情景が、タンゴの軽快なリズムにのって描かれている。

「第3曲　セビリャの聖体祭」　嬰ヘ短調

南スペインのわらべ唄風の旋律を行進曲風にアレンジしたものと、荘厳なキリスト教の賛歌が交錯して用いられ、セビリャの古風な祭りの行列が描かれている。

グラナドス（1867～1916）

グラナドスは、アルベニスと並ぶスペイン近代音楽の開拓者である。ピアニストとしても活躍し、作品にはピアノ曲が多いが、歌劇や歌曲にも優れた才能を示した。「スペイン舞曲集　作品37」はバルセロナで1892年に作曲され、12曲から成っている。洗練されたスペイン的雰囲気が作品のすみずみにまでただよっているが、グラナドスはスペインの民族音楽の要素をそのままの形で用いてはいない。つまりグラナドスのスペイン的情緒は、アルベニスの場合ほど直接的・具体的なものではなく、詩的なロマンチシズムによって昇華された彼固有のものとなっている。

「第2番　オリエンタル」　ハ短調

ギターを思わせるアルペジオによって支えられた悲哀に満ちた旋律は、東方への郷愁を感じさせる幻想的でエキゾチックな雰囲気をかもしだしている。

「第5番　アンダルーサ」　ホ短調

アンダルーサとは、「アンダルシア（南スペイン）の調べ」という意味。寂しく吹くような低音のリズムに乗って奏される甘美な旋律は印象的である。スペイン舞曲集の中でもっとも名高い曲であるだけでなく、グラナドスの作品中もっとも広く愛好されている作品でもあり、ヴァイオリンやギターなどにも編曲されている。

「演奏会用アレグロ」　嬰ハ長調

この作品は、1904年にマドリード王立音楽院が行った作曲コンテストで1位となった曲である。テンポ、強弱、曲想などの点で非常に変化に富んだドラマチックな音楽である。その反面、叙情的で幻想的な優雅さにあふれ、まるでショパンを思わせるような繊細・華麗なところもある。それらの多様な特徴が、知的で論理的な楽曲構想によって見事にまとめられている。

曲目解説　須貝静直